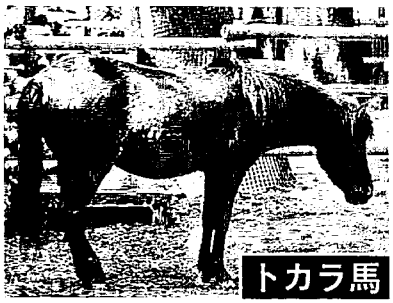
日本経済新聞（夕刊）
2010年（平成22年）5月8日（土曜日）

古来農耕などで重用

育て 在来馬

古来、農耕などに使われ日本人の生活を支えてきた在来馬の存在を知ってもらおうと、上野動物園（東京・台東）が飼育と公開に力を注いでいる。3月には「木曽馬」の赤ちゃんが生まれたほか、4月6日からは日本最西端の沖縄県与那国島原産の「与那国馬」を公開。現在、残存する8種のうち4種計5頭を飼育しており、担当者は「それぞれの特徴をじかに目にすることで、文化遺産としての貴重さを感じてほしい」と期待する。

木曽馬


トカラ馬

与那国馬

野間馬

上野動物園に4種5頭
収集・公開に力

上野動物園で現在、飼育しているのはサトウキビの収穫や加工作業などで使われたトカラ馬（鹿児島県）と与那国馬、平安末期の武将・木曽義仲も乗ったとされる木曽馬（長野県、岐阜県）、ミカンの運搬で活躍した野間馬（愛媛県）。悪天候時などを除き、園内「子ども動物園」の小牧場で公開している。

同園などによると、競走馬のサラブレッドなどに比べて小柄でずんぐりとした在来馬は、軍馬が必要になった明治維新以降に西洋種との交配が進んだことや、乗用車の普及で減少の一途をたどり、現在は8種1800頭あまりが残るのみ。戦後に在来馬を飼育していた同園でも、外国原産小型種のポニーやミニチュアホースを入れた影響で、1974年にいったん姿を消した。

「全国の動物園から在来馬を減らすきっかけをつくってしまった」（小宮輝之園長）との反省に立った同園では、2007年10月に鹿児島大農学部からトカラ馬の寄贈を受けたのを皮切りに在来馬の収集・展示の復活に取り組んできた。5月11日から20日までは、野間馬の特徴や保護の現状などをパネルで紹介する企画展も開催し、PRを進める。

同園は今後も飼育スペースが許す限り、種類を増やしたい考え。馬への訓練や十分な安全対策を講じた上で、将来的にはぬくもりを感じられる触れ合い体験の実施も検討する。教育普及課の高藤彰係長（58）は「在来馬は昔から日本人の生活に寄り添ってきた存在。都会の多くの人たちに愛着を持ってもらい、貴重な文化遺産の保存の機運を高めたい」と話している。

現存する在来馬の飼育頭数
（2008年度、日本馬事協会調べ）

種類	原産地	頭数
北海道和種馬（道産子）	北海道	1,254
木曽馬	長野県、岐阜県	149
野間馬	愛媛県今治市	81
対州馬	長崎県対馬	30
御崎馬	宮崎県都井岬	115
トカラ馬	鹿児島県トカラ列島	115
宮古馬	沖縄県宮古島	31
与那国馬	沖縄県与那国島	85

▼在来馬　古墳時代以降に朝鮮半島やモンゴルから導入された馬が祖先と考えられている。小柄だが力が強く、粗食にも耐え、日本各地で農耕・運搬作業や騎馬用として重用されてきた。

しかし、明治時代に入って軍事用に大型化しようと西洋馬との雑種化が進んだことや、輸送手段の発達などで激減。産地名を冠した在来馬は2008年度時点で北海道和種馬、木曽馬、野間馬、対州馬、御崎馬、トカラ馬、宮古馬、与那国馬の8種計1860頭を残すのみとなっている。

原産地の保存会が繁殖などに取り組んでいるものの、メンバーの高齢化や新たな担い手の確保難が課題となっている。